

研究や対策は世界のトップレベル

—日本の「いじめ」を国際的に見る—

滝 充・国立教育政策研究所総括研究官



海外においても、日本と同様、「いじめ」は深刻な教育問題の一つになっている。ただし、海外でいじめを意味する「ブリンク」(bullying)の語は、日本で言ういじめだけでなく、日本ではいじめとは区別されて扱われる「暴力行為」(かつての校内暴力と校外における行為の総称)までをも含む。否、むしろ後者が主とすら言える。このいじめとブリンクの関係というのは、例えるならスパゲティとパスタの関係になる。だから、いじめ(イコール)ブリンクと思いついて議論すると大きな誤りを犯す。細長いめんのもりでいたら、ラザニアが出てきて困惑するようなものなのだ。ところが、マスコミ関係者や教育関係者、果ては研究者までもが、その違いに気付かぬまま、いじめ≡ブリンクと信じ込んで海外の対策等を紹介したがる。だが、異文化比較は、辞書の訳語で間に合うほど単純ではない。

ブリンクという語から人々が想起するイメージを理解してもらうために、二つの例を示そう。

・ブリンクは男子特有の問題ではなく、女子にも起こり得る。

・私は女だから、ブリンクなんてしない。

前者は、少し前までのブリンク研究の著作によく見られた一節である。後者は、カナダの研究者が自分の娘にいじめ経験の有無を尋ねた際の返答である。要するに、ブリンクの一般的イメージは、「乱暴な男子が行うような行為」なのである。

では、日本の仲間外れや無視のような行為が海外には存在しないかと言うと、そんなことはない。日本にもすっかり定着したセクハラという言葉の語源であるハラスメント(harassment (嫌がらせ))という語を用いて尋ねると、例えばカナダの女子も男子も経験があると答える。だが、ブリンクの語からこうした行為を思い浮かべてもらえるとは限らない。そこが問題なのである。

言葉を独立して用いたことが幸い

そうした日本のいじめに類する行為に限定すると、日本の研究や対策は国際的に見てトップレベルにあると言える。こう書いても、にわかには信じてもらえないに違いない。もしそうなら、なぜいじめが日本で問題になり続けているのか、とい

う疑問が出てくるはずだからである。その問いには後で答えるとして、日本の研究や対策が進んでいるのは間違いない事実である。そう言った要因の一つに、「いじめ」という語を独立して用いることができたことの幸運を指摘できよう。

一九七〇年代後半から八〇年代前半にかけて、日本の学校は校内暴力の渦中にあつた。その後、警察との連携等によってあからさまな暴力が沈静化していくにつれ、関係者は「新しい形の暴力」が学校にまん延し始めていることに気付かされることになる。それは、物理的な方法(腕力等)によって物理的に危害を加える通常の暴力とは異なり、相手を精神的に追い込んで精神的に危害を加えようとするもので、その方法も多様であつた。

この新たな暴力は以前からの日本語を用いて「いじめ」と呼ばれ、通常の暴力行為とは一線が画されることになった。いじめも暴力もブリンクの一語で表現する海外とは対照的と言えるが、この違いこそがその後の大きな差をもたらすことになる。

例えば、日本では九六年に「深刻ないじめは、

どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こりうる」との文相(当時)の緊急アピールが出されている。一方、海外では、国レベルでそうした明確な認識を示している例はない。むしろ、「家庭等に困難を抱えた乱暴な子供が起こす問題」といった、昔ながらの暴力行為と同様のとらえ方をする研究や対策がほとんどである。ブリングという語を用いる限り、いじめだけでなく、あらゆるさまざまな暴力行為も含まれる。そうすると「どんな子供でも起こす」との認識には立てない。

あるいは、日本で問題になっているインターネット等を用いた攻撃。新たなツール(道具)が用いられ、その攻撃力もインターネットの匿名性や伝達力によって増幅されてはいるものの、行為の本質は旧来からのいじめと何ら変わらない。一方、海外でも電子メール等を用いた攻撃は問題になっている。ところが、サイバーブリング(cyber bullying)と名付けられてはいても、全く新しい行為の登場との受け止め方が少なくない。物理的な方法を一切用いない攻撃は、旧来のブリングのイメージと大きく懸け離れているからであろう。

実は、七〇年代は、どの先進国においても男子を中心とした暴力行為が問題になっていた。ところが、八〇年代以降になっても、海外では七〇年代の延長線上でしか研究や対策がなされなかった。かつて男子による暴力行為に用いられたモビング(mobbing)の語は新たにブリングの語に変わったものの、その理由は前者が単数の加害者による行為を想起させにくいからであった。

その後、ブリングの語は女子にも悪口や仲間外れ等の行為にも用いられるようになる。しかし、そこでなされたのは「乱暴な男子が行うような行為」という過去のイメージの拡張にすぎず、日本のように新たな暴力の登場という認識には至らなかった。

その結果、海外で起きたことは、日本のいじめに類する行為の見落としや軽視、研究や対策の欠落であった。その状況を理解するには、児童虐待の例について考えてみると分かりやすい。虐待という語の一般的イメージは、殴るけるであろう。

もちろん、ネグレクト(無視)という語の登場を契機に、愛情を注がない精神的虐待の存在も認識されるようにはなっている。ところが、いざ虐待について論じ始めると、やはり中心になるのは殴るけるに偏ってしまう。目に見えやすい物理的な虐待に対して、目に見えない精神的な虐待。目に見える傷跡に対して、目に見えない精神的な傷跡。ネグレクトという語が存在してさえ、虐待という一くくりの言葉で論じられるや否や、精神的な虐待は隅に追いやられてしまう。

いじめに類する行為の研究や対策で日本が海外に先んじることができた要因に、従来の暴力行為とは明確に一線を画す「いじめ」という語の登場を指摘したのは、そんな理由からである。

進む国際比較の工夫と試み

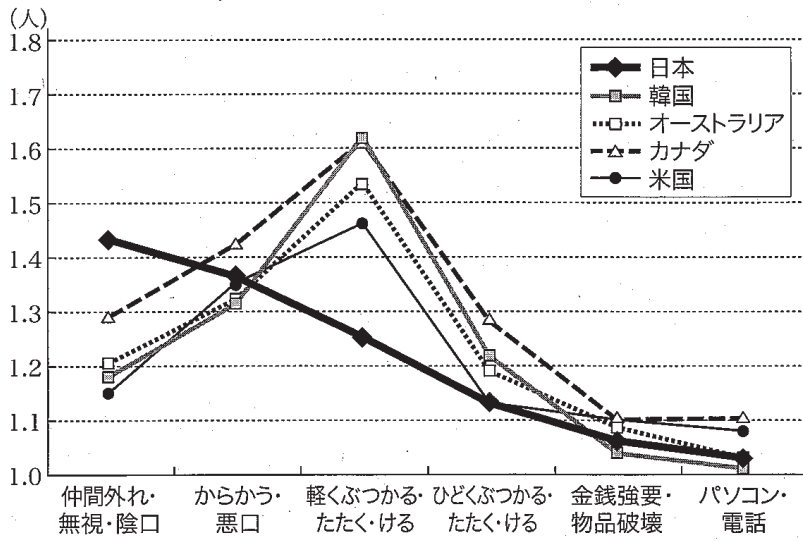
では、日本のいじめの状況を海外と比較するには、どうしたらよいのであろうか。いじめブリン

グという誤った図式に基づく限り、いくら議論を繰り返して、調査を重ねようともずれば残ったままである。海外の子供の回答は主に「乱暴な男子が行うような行為」をイメージしたものであるのに対し、日本の子供の回答は「日本で言ういじめ」をイメージしたものになる。そこで、いじめとかブリングといった言葉を一切用いないで、また従来のいじめやブリングの定義とは異なる説明を示して、「日本で言ういじめ」に焦点を当てて行われたのが、国立教育政策研究所による「いじめの国際比較調査」である。

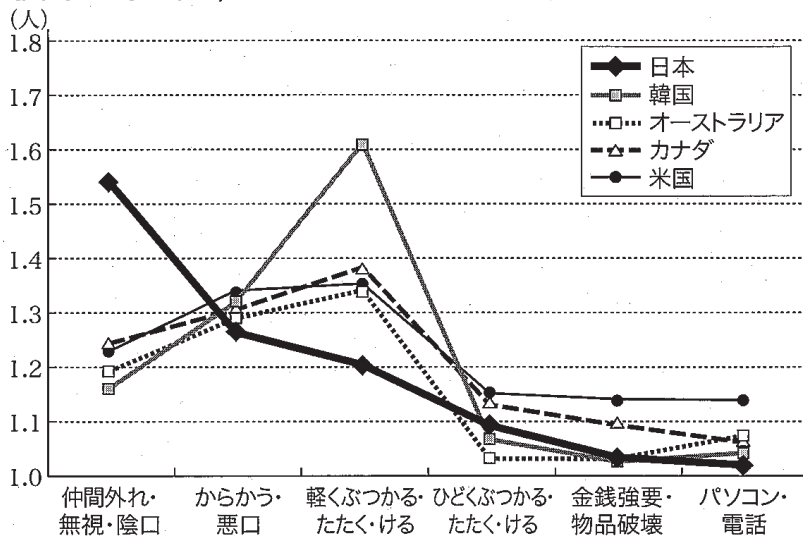
具体的には、「みなさんは、学校の友だちのだからから、いじわるをされたり、イヤな思いをさせられたりすることがあると思います。／そうしたいじわるやイヤなことを、みんなからされたり、何度も繰り返されたりすると、そうされた人はどうしてよいかわからずにとっても苦しい思いをしたり、みんなの前で恥ずかしい目にあわされてつらい思いをしたりします。／これからみなさんに質問するのは、そうしたいじわるやイヤなことを、むりやりされた体験や、反対に弱い立場の友だちにあなたがした体験についてです」といった説明に続き、「仲間外れ・無視・陰口」「からかう・悪

最新 **用字用語ブック** [第5版]
分かりやすい文章を書く手引
全面改訂 用例さらに充実!
文章を書く人必携!
時事通信社
●新書判736頁●定価1785円
時事通信社編

〔図1〕 小学5年生/男子加害経験の平均値



〔図2〕 小学5年生/女子加害経験の平均値



「口」「かるくぶつかる・たたく・ける」「ひどくぶつかる・たたく・ける」「金銭強要・物品破壊」「パソコン・電話による行為」といった六つの行為について被害経験と加害経験を尋ね、米国、カナダ、オーストラリア、韓国との比較を行った。その結果の一部を示したのが図1と図2である。小学校五年生の一学期分の加害経験について、「週に一回以上」を三点、「時々」を二点、「な

し」を一点とした平均値を求め、男女別に国ごとの折れ線グラフで表示している。ここからは、海外の子供は、いじめや嫌がらせに類する行為に焦点化するためにブリングの語を用いずに尋ねた場合でさえ、たいたたり脅したり等の乱暴な方法をよく用いることが分かる。反対に日本では、仲間外れ等については他国を圧倒するが、腕力等を伴う行為はあまり見られず、通常の暴力を容認しな

い風土であることがうかがえる。

求められるこれからの対策は

では、なぜ研究や対策が進んでいない日本において、いじめの問題が依然として発生し続けているのか。それは、国際比較からも分かる通り、日本のいじめの多くは、虐待におけるネグレクト同様、「第三者の目には(行為も傷跡も)見えにくい」形で行われているからである。しかも、被害を第三者に訴えたり相談したりするよう促しても、それには限界がある。他人に知られたくない事柄を口実に攻撃されたり、いじめられていること自体を知られたくないと感じる方法で攻撃されたりするのが、いじめという問題の特徴だからである。

こうした中で求められる対策は、一部の加害者や被害者を想定した従来の暴力対策とは大きく異なる。問題に事後的に対応するのではなく、問題を起きにくくするしかない。つまり、すべての子供が加害者にならなくて済むよう、すなわち子供に健全な社会性がはぐくまれていくよう、教育の根本的な在りようを改善するしかない。そうは言っても、全員の子供を対象とした社会性の育成という地道な取り組みに即効性はない。少し油断すれば、目の前の問題対応に追われて後回しにされかねないし、手軽なスキル訓練等でお茶を濁しかねない。だが、地道な日々の教育を見直し、本当に社会性がはぐくまれているのかを確かめながら教育を行う姿勢なしに、いじめを減らすことはできない。